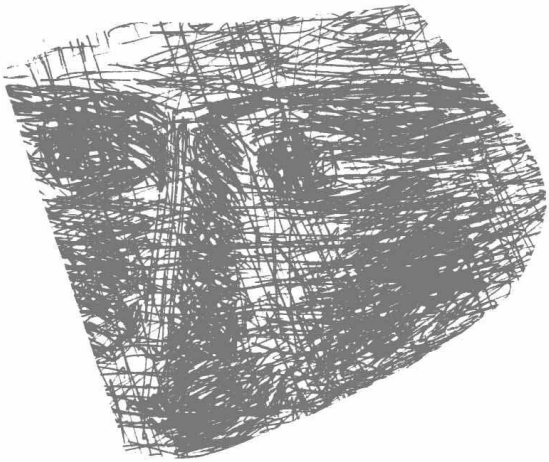
黒の記憶

佐賀潛



黒の記憶

昭和38年4月10日第1刷発行
定価 300 円

著　者　佐賀　潜

発行者　野間省一
東京都文京区音羽町3の19

印刷所　豊国印刷株式会社
東京都文京区大塚坂下町114

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3の19
振替東京 3930 電話東京（941）大代表 3111

目次

第一章　弁護士緒方直矢　……五
第二章　檻の中の女　……二八
第三章　檻の中で泣く　……五〇
第四章　檻の中で笑う　……七三
第五章　檻の中で怒る　……九六
第六章　檻の中で悩む　……一一九
第七章　檻の中で喚く　……一四二
第八章　檻の中の歳月　……一六五
第九章　檻の中は遠く　……一八八
第十章　弁護士への報酬　……二一一
あとがき

装幀

早川良雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黒の記憶

第一章　弁護士緒方直矢

1

わびしい銀座の朝である。

どのビルも店も、まだ眠りからさめていない。空は鉛のように重く、人通りの少い舗道を、紙屑が風に舞っている。

弁護士緒方直矢は、長い油気のない髪を、なびかせながら、茶色のよごれたビルの前で足をとどめ、三階の窓を仰いだ。窓は閉っていたが、白いカーテンが左右に開いていた。

今時、銀座にこんなきたないビルがあるのかと驚くほど、附近の建物とは様子がちがっている。どのビルも五階以上はあるのに、この三恵ビルだけは、三階しかない。四十五年前に、建てた当時は、モダン建築だったらしいが、今では、旧世紀の遺物のような、感じさえする。一階がケルンというレストラン、二階が歯科医とシネマグラフの出版社、三階が洋傘組合の事務所と、緒方法律事務所となっている。

緒方は、ビルの左側の入口から入る。入口に、ペンキ塗りの名札が下っていて、各階の居住者の称号が書いてある。

緒方は、狭い階段をのぼる。明り窓がないため、途中に電灯がついている。化粧張りのない、コンクリートを塗っただけの階段は、拘置所のような感じがする。固く冷たいものを、靴の裏に意識しながら、緒方は、「弁護士階段をのぼる」とつぶやき、笑いを嚙み殺した。

緒方は、公判のない日は、必ず、午前九時に事務所へ出勤する。事務所への階段は、かなり急勾配である。この階段をのぼるとき、緒方はきまって何かを考えるのである。

弁護士が階段をのぼる——階段とはなんだろう。一流の弁護士になることだろうか。著名な事件を担当し、自家用車を乗り廻わし、豪壮な邸宅を構える。それが一流だとすれば、到底おぼつかないことである。

東京には、二千七、八百人の弁護士がいるが、新聞の紙面をにぎわすような事件は、十人内外の有名弁護士が担当してしまう。彼等には、長年の間、築いてきた地盤がある。その地盤が、蜘蛛の巣のように、東京都内に張りめぐらしてある。弁護士界に、学閥はないが、それでも、C大出身の弁護士は、羽振りがいい。年々行われる高等試験の合格者の、出身校を調べると、たちどころに了解できる。三百名余の合格者のうち、三分の一をC大が占めているからである。

T大でさえ、例年、四、五十名であるから、他の私大は、推して知るべきだろう。緒方は、私大のうちでもK大出身である。K大が、この試験の合格者を出すのは、毎年、一、二名にとどまる。

従って、緒方は、法曹会に、所謂顔がなかった。しかも、三十六歳の若さとあっては、勿論地盤など皆無といっていい位である。緒方は、K大で法律を学んだ。父は、三流ではあるが、建築材料を販売する会社を経営していた。が、その父は、借金の保証人となったため、債権者に責められ、それを苦にして、死期を早めてしまった。緒方が、大学二年の秋である。父の遺産は、ことごとく債権者の手によって、競売に附され、緒方は母と共に、無一物となって抛り出された。若い緒方の心の中に、法律の非情さが泌みこんだ。緒方が、弁護士を志したのは、その時からである。法律とはなんだろう。人間を拘束するためにのみ、存在するのだろうか。

法の冷たさを身をもって眺め、法の冷たさに勝つには、法を知ることであると、さとったのである。

緒方は、高等試験に合格し、司法修習を終えると、弁護士の登録をした。新登録の弁護士は、必ず、どこかの法律事務所へ入り、十年以上、修業を積むのが、慣わしである。二十代の男が、看板を出したところで、事件の依頼者は一人だってあるはずがないからである。緒方が、いきな

り事務所を持ったのは、成算があったわけではない。亡父の親友だった、三恵ビルの持主が、小田急沿線に、高級アパートを持っていて、時々、借家人とトラブルがあるので、顧問弁護士を引受けてくれといってくれた。緒方は、喜んで応じた。顧問料と三恵ビルの事務所の家賃を、相殺勘定にしてくれるというので、銀座に、事務所を持つことができたのである。

緒方は今、三階へのぼりながら、「金が慾しい」と、自分でも驚くような大声で、独語した。緒方の生活は苦しく、絶えずそのことが、頭の中にあったからである。

——金だ。金がなければ、どうにもならない。一流弁護士になど、なれるものじゃない。金だ。金が慾しい——

緒方は、事務所のドアを開けた。

女子事務員星野早苗が、かん高い声で朝の挨拶をした。

「先生、昨日の夕方、山口木材が、一万円持って参りました。この金包を置いて、逃げるように、帰ってしまいました」

早苗が、御礼と筆で書いてあるのし袋を、差し出した。

「一万円とは、ひどいな。十万円は持ってくると思っていたよ」

「先生は、人がよすぎるからだと思うの。弁護士は、社会奉仕をしているんじゃありません。ビジネスなら、必ず、成功謝金をいくらにするか、契約書を取っておいたらいいと思うんですけど」

「あの男は、詐欺事件の公判のとき、二万円の着手金を持ってきた。その時、執行猶予にして下されば、充分お礼させていただきますといっていた。だから」

「だから十万円持ってくると、思っていらっしったのですね。それが先生の甘さなのよ。先生、弁護士は、法廷戦術より、お金を上手に取ることが、一流弁護士になるコツだと、いわれています。ほんとに、じりじりしてくるわ」

「僕は、金には縁がないらしい」

「だから、私は、税理士になるわ。今年、一科目合格したから、後四科目。私が、税理士になったら、この事務所は、うんとお金が儲かると思うの。だって、商店でも会社でも、税金対策が、最大の関心事だといわれています。税

務署に否認された額が、仮に一千万円とすれば」
「その一割を、税理士が貰うというのが、君のねらいだろう。そうは、いかんよ」
「少くとも、弁護士より、収入は多いはずです」
緒方は、スプリングの抜けたソファに腰を落した。早苗が番茶をいれてくれた。
六坪しかない事務所は、みるからに殺風景である。緒方の机も、ニスが剝げ、表面に大きなヒビ割れがきている。書棚が二つあって、法律書が並び、タイプと早苗の机があるだけである。床は、古風なリノリュームで、原色の茶色は、最早黒ずんでいる。僅かに、星野早苗の緑色のワンピースと、明るい顔が、息の詰るのを救っているに過ぎない。
早苗が、タイプを叩き出した。緒方は、その横顔を眼の端にとどめた。鼻は余り高くないが、色白の顔に、こぼれるような愛敬があった。
早苗の月給は一万三千五百円である。N女子大の家政科を出ると、三恵ビルの持主の紹介で、緒方の事務員となった。二年前の春である。早苗は、よく働いた。給仕、書生、タイピスト兼秘書というように、一人で五役位の仕事をやってくれる。今年の八月、早苗は、税理士試験をうけた。
「先生、私、税理士になります。若し合格したら、この事務所を使わせてくれますか。勿論、事務所経費は、半分持ちます。そうなれば、私のお得意先から、法律事件を、先生に頼みにくると思いますが」
緒方は、早苗の言葉に驚いた。二十四歳になるまで、恋愛の相手もなく、嫁入の話もないので、内心、気になっていた。
「君は、お嫁さんにはならんのかね」
「そんな気持はありません。私はね先生、お金が慾しいのよ。現代にとって、金銭は万能と思います。先生だってそうでしょ。若し、先生にお金があったら、私、それこそ、先生のお嫁さんになるわ」
早苗が、屈託のない表情で笑った。緒方は、その笑いを冗談だと聞き流そうとしたが、心にひっかかるものがあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

緒方は、五年前、妻に死別している。やっと小学校二年生になったばかりの、子供の正矢を抱え、緒方は、全く途方にくれた。新宿区原町一丁目の自宅に、妻が嫁入りしてくる時連れてきた、石川みねという婆やがいて、家事一切と子供の面倒をみてくれた。それ以来五年間、緒方は、独身を通している。亡妻の想い出も、遠い過去となったはずである。後妻の話も、何回か持込まれたが、緒方はその気になれなかった。

理由は、金がないという一事にあった。原町の家は、敷地三十一坪、建坪十九坪の小住宅だが、隣りの酒家から借家していた。一万八千円の家賃は、滞りこそないが、これを毎月払うのが相当苦しいのである。家賃の外、早苗の給料、事務所と自宅の電話代、その他事務費や交通費を入れると、生活費の四万円の外に、どうしても毎月五、六万円かかる。従って、毎月平均十万円の収入をあげていかねばならない。

緒方の収入は不定だった。五万円の月もあれば、二十万円の月もあった。平均月十万円が、ピークといえる線だった。だから、後妻など、思いもよらぬことだったのである。

2

その朝、意外な男が訪ねてきた。

電話で、あらかじめ時間の打合せをしたわけではなく、佐伯進吾の長い顔が、ドアから覗いて、緒方と視線を合せると、軽く頭を下げて入ってきた。

「いて、よかったよ。君が、いなかったらどうしようかと思っていた」

「こっちも驚いたよ。まさか、君が訪ねてくるとは……学校を出て十四年、君の結婚式に一度呼ばれたことがあるだけだな」

「全くだ。用のあるときだけ、押しかけてきてすまん」

「用とはなんだ」

「勿論、事件さ」

佐伯は、煙草をくわえ、匂いのいい煙を吐き出した。

佐伯は、K大法学部時代の学友である。二人は、特に親

しい間柄ではなかったが、間瀬教授の刑法のゼミナールで一緒だった。二十三人の仲間がいて、夏季の合宿をしたり、教授の自宅へ押しかけたりした仲間である。佐伯は、卒業と同時に、叔父宮城達男の経営する太平精糖株式会社へ入社し、現在、取締役で工場長をやっている。緒方と同年の三十六で、この地位を得ているのは、社長の甥という立場が、そうさせたのだろう。

「事件を聞こうじゃないか」

「十月二日、僕の自宅の隣家で火災があった。丸焼けになって、その家に住んでいた男が焼け死んだ」

「新聞で読んだような気がするよ」

「その事件で、僕の元の女房が、一昨日、検挙された」

「元の女房とはなんだ」

「君に、結婚式のとき来て貰ったが、あの女房だ」

「南部章子」

「そうだ。君だから、なんでも話すが、僕は章子と猛烈な恋愛の末、一緒になった。勿論、倖せだったよ。桜子という女の子を一人もうけた。その子はいま八歳になる。僕は、小田急沿線の祖師ケ谷二丁目に、六百坪の土地を買い、そのうちの四百坪を屋敷として家を建てて住んでいる。残りの二百坪は、弁天池という池のほとりだ。土地が低かったので、簡単な家をこしらえ、女房が連れてきた婆やと爺やを住まわせておいた。その家が焼けたんだ」

「爺やが死んだのか」

「爺やは、五、六年前に病死したんで、婆やは、僕の屋敷へ引取った。その空家へ、黒田治郎という、僕の会社の社員を、住まわせておいた。その黒田が焼け死んだのだ」

「その火事と、君の女房と、どんな関係があるんだい」

「いやな話ですまんが、章子と黒田が姦通していたんだ」

「姦通罪は、刑法から削除されたよ」

「要するに関係が出来ていた。僕が、それを知ったのは、火事の半年前頃だ。僕たちは、大いに争った。それこそ殺人沙汰も起しかねない位、喧嘩した。だが、章子の気持は、荒れ狂う火に油を注いだように、燃えたっていったのだ」

「黒田を、そこに住まわせたわけは」

「君も知ってるとおり、僕は、大学時代からゴルフをやっていた。叔父の会社へ入ってから、会社にゴルフ部をこしらえ、暇をみては、練習場とコースへ通った。僕がメムバーになっている、城南カントリーのアシスタントプロをしていたのが、黒田治郎だった。黒田は、元M大ゴルフ部のキャプテンで、ハンデはスリーだった。僕は、黒田のコーチをうけた。おかげで、僕のゴルフは、十一になった。黒田は、プロの試験に落ちると、日本橋で、ゴルフサービス業をはじめるようになったんだ。僕も、若干の金を出してやった。黒田は、この事業に失敗してしまった。僕は、頼まれて、黒田をうちの会社へ入社させてやった。僕が工場長をしている横浜工場の、倉庫課に入れて、働かせておいたのだ」

「黒田の女房は」

「アシスタントプロ時代に、クラブの女子職員と恋愛し、結婚したが、子供は生れなかった。黒田の女房は、章子と黒田の仲を知ると、茨城の実家へ帰ってしまった」

「で、黒田は、焼死するまで、太平精糖に勤めていたのかね」

「辞めたんだ。昨年十二月、同僚や上役とソリが合わず、辞表を出した。それ以来、仕事は何もやらず、ゴルフ場通いと、章子とのあいびきに、日をおくっていたらしい」

「生活費は」

「章子が、みついでいたと思うよ」

「章子さんて、そんな女だったのかね」

緒方は、十年前、帝国ホテルで行われた、佐伯進吾と南部章子の結婚披露宴を思い出した。来会者三百名近い盛宴で、新婦のきわ立った美貌に、緒方は羨望の溜息を吐いた。三回もお色直しをしたが、その都度、章子は仲人の婦人に手を取られ、緒方のテーブルの脇を通った。

古風な顔立だが、やわらかいなまめきに包まれ、ややうつむきながら、通り過ぎた。形のいい鼻と口元は、京人形のようだったし、黒い、水をたたえたような二重瞼の眼は、涼しげに恥らいを含んでいた。難をいえば、背丈が、一米五十糎位しかなかったのが、惜しまれた。

仲人の紹介で、二人の経歴が語られた。

――新郎は、本年二十六歳。東京都墨田区で、佐伯竜吾、政子の一人息子として生まれました。父竜吾氏は、砂糖問屋佐伯商店を経営していましたが、新郎が三歳の時、病没されました。佐伯商店は、母政子が夫に代って営業をつづけておりました。ところが、この母も、新郎が五歳のとき病を得て亡くなりました。新郎は、叔父宮城達男氏に引取られ、養育をうけることになりました。新郎は幼時より聡明な子供で、K大の幼稚舎に入り、順調に、大学の法学部を卒業したのであります。ご覧の通りの美丈夫で、スポーツを愛好する、明朗闊達な青年であります。現在、太平精糖株式会社の倉庫係長でありますが、将来は、宮城社長を助け、会社の重要ポストにつくにちがいありません。

新婦の南部章子さんは、豊島区で、ベヤリングを製造している、日加産業株式会社の社長南部清介氏の長女であります。清介氏は、長い間小学校の教員をしていた人で、中年を過ぎてから、ベヤリングの製造を思いつき、独学で英米の原書を読破し、十数個の特許を取った、立志伝中の人物であります。新婦は、この父の養育をうけ、A女子学園から、そこの短大の生活芸術科を卒えられました。皆様、ご承知のように、天与の美貌の持主であるばかりでなく、その性質も、まれにみる温順な女性で、当年二十歳であります。

二人は、新郎がK大の頃から、ゴルフを通じて相知り、今日まで、清潔な交際を続けて参りました。私は、宮城達男氏と同業の関係から、新郎を知り、ついで新婦を知るようになったのであります。二人の結婚については、少からず努力し、とうとう仲人まで引受けるに至ったのであります。何卒、若い二人のため、末長く御指導御鞭達のほど、お願い申し上げます――

それは、晴れがましい数時間であった。

緒方は、その後、幾日もの間、佐伯進吾の生活を思いつづけた。緒方は、既に、二年前、妻を迎え、男児を得ていた。恋愛の経験もなく、母の親戚から嫁の話を持込まれ、一回の見合で、結婚式のまねごとをしてしまった。妻の秋子は、従順な女だった。平凡だったが、倖せな日々がつづいていた。

佐伯の結婚披露の時から、緒方の心の中に、小さな空洞があいた。自分の貧しさをかえりみると同時に、自分を不幸と思いこむようになったのだ。が、その空洞も、生活に追われているうちに、忘れていった。

緒方は、そんなことを思い出しながら、妻を失った自分と、妻に背かれた佐伯の運命を比較してみた。

緒方は、佐伯の顔をみつめた。学生時代から、「馬」とアダ名のある、ゴルフ焼けした長い顔が、横を向いた。緒方の視線が堪えられなかったのだろう。

「佐伯君、三日前の新聞で、弁天池の焼死事件を見たとき、南部章子が犯人として書かれてあったので、うっかり気にもとめなかったのだが。なぜ、佐伯章子じゃないのかね」

「実は、離婚したのだ」

「離婚——信じられないね」

緒方は、息の詰るほど驚いた。

「黒田が、焼け死んだのが十月二日の晩。章子は、その翌日、区役所から協議離婚届の用紙をもらってくると、無理矢理に僕の署名をさせ、離婚届を出してしまった。その日から、豊島区の実家へ帰ってしまい、十月九日に、その実家で逮捕されたんだ」

「で、証拠は」

「二日の晩、十一時頃、章子の足音を聞いていた人間がいた。弁天池の中洲に出来ている、町内の集会所で、石森圭吉という近所の男が、酒に酔ってうたた寝をしていて、僕の家の裏口の石段を下り、池のほとりを伝って、黒田の家へ近づく、女らしい足音を聞いていた。それと、女中の大場富子が、章子の後ろ姿を、庭から目撃していた」

「それだけじゃ、有罪の証拠とはならないな。物証はあるのか」

「焼け残りの、ジャパンタイムスという英字新聞があった。その新聞は、僕の家で取っていた新聞だった。日附が十月一日で、僕の家に、その日附の新聞がなかった」

「動機はなんだろう」

「女中の大場が、警官にしゃべったんだ。章子と黒田治郎が、みにくい関係にあって、旦那が不在の時は、裏の石段

を下りて、会いに出かける。その晩も同じように……と述べたんで、章子に、嫌疑がかけられた」
「章子さんは、なんのために、黒田の家に火をつけたんだろう」
「そいつは、よく判らん。僕の推定じゃ、清算するつもりじゃなかったかと思うが、本人に会ってないんで、なんともいえない」
「僕には、納得できないことばかりだ。第一が、章子さんと、黒田の密通だ。僕は、結婚の披露のとき、見ただけだが、少くとも清潔な印象をうけたよ。君のような立派な夫があって、可愛いい子供まであるのに、理解できないよ」
「僕は、少くともいい亭主じゃなかったのだろう。表面は、章子にとって、倖せに見えたが、本当は不幸だったと思うよ」
「というと、君は、外に女でもいたのか」
「そんなことはなかったよ。だが、夫婦なんてものは、形や金銭じゃないものが、絶対に必要なんだ。たがいに寄り添う心が欠けていた。黒田は、僕より三つ下の三十三歳。色白の美男型で、話しがうまかった。章子が、黒田にひかれていったのは、人間の暖か味だったと思う」
緒方は、佐伯の説明にうなずいた。が、筋のとおった話として、納得したわけではない。女が、夫以外の男性と通じるということは、容易なことではないと思われた。まして、章子は、教育にたずさわっていた南部清介の、子として育っている。短大まで学業をうけ、一流会社の重役夫人として、平穏に暮らせる環境にあった。その夫人が、夫の部下と邪恋にふけることは考えられなかった。
「第二の疑問は、動機だ。章子さんに殺意があったかどうか判らんが、なんのためだろう。君は、黒田との間を、清算する心算だといったが、黒田の住居が焼失すれば、邪恋の清算がなぜできるんだ」
「あの家が焼ければ、黒田が引越さざるを得ないからだろう」
「そりゃ、おかしいな。家が焼けようが、あいびきはできるからね」
「そのとおりだ。だから、僕にもよく判らんのだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com